



「宗教国家」アメリカ合衆国？

すずき かずこ
鈴木 和子

●テキサス A & M 大学 社会学部 准教授

30年近く米国で暮らしているが、いまだに慣れないことがある。そのうちの 하나가、キリスト教（プロテスタント）の影響が、生活・行政・教育のあらゆる面に及んでいることである。現在の米国は、政教分離を憲法で掲げ、信教の自由を保障しているので、厳密には「宗教国家」とはいえない。しかし、米国でキリスト教の影響を軽んじると、のっぴきならない状況に追い込まれてしまうこともあるので、細心の注意が必要である。私はキリスト教徒ではないが、日本で幼稚園から大学までメソジスト系の学校に通っていたので、平均的な日本人よりは、キリスト教に慣れ親しんでいるはずなのだが、いまだに頭をかき上げたり、怒りを覚えたりすることがある。逆に、人種差別が激しく保守的なテキサスではキリスト教徒かどうかは重要であり、とっさに聖書の数節や「主の祈り」を暗唱して危うく難を逃れた場合もあった。以下、宗教に関する、過去・現在の経験を記すことにする。

筆者が結婚をしたのは、ニューヨークのコロンビア大学からテキサスにある現在の大学に移籍した2005年。多忙と金欠を理由に結婚式は挙げず、直接役所に届け出を行った。当事者合意のうえ書類さえ提出すれば婚姻は済むと安易に考えていたのだが、甘かった。日本のような戸籍制度はないので、結婚証明書を発行してもらうため、急遽その場で、簡易結婚式を挙げなくてはならなかった。選択の余地なく、いきなり合衆国の旗のもとで聖書に誓わされ、婚姻にいたる。「なんで宗教国家でもないのに、役所でキリスト教一択？」という疑問はあったが、夫は自称カトリックだし、

ここで波風立てても先に進まないと、そのまま結婚を誓い、証明書を発行してもらった。

米国での婚姻要件は、州や同じ州内の郡によっても異なる。我々の「結婚式」は田舎の役所で急遽行われたので、アメリカ人にとってのデフォルトにあたるキリスト教で行われたのは仕方ないことだと思っている。ただ、裁判所も、デフォルトがキリスト教で、個人の宗教に関わらず、皆が聖書に誓いを立てるのを求められるのには、どうにも納得がいかない。しかし、裁判所で問題を起こすのは裁判官や陪審員への印象を悪くするので、心の中では「これって違憲では？」と思いつつ、黙って聖書に手を置いて、神妙に「聖書に誓って真実のみを話します」と言うことにしている。

キリスト教系の病院に行くと、産婦人科の検診は無料であることが多い。これを、「タダで得たかも」なんて思っただけとはいけない。このような病院では、いかなる理由で妊娠しようと堕胎は許されず、出産が大前提で処置が進められる。レイプされて妊娠したからといって、たとえそれが本人の希望でも、堕胎はできない。米国大統領選が近づくと、必ず堕胎に関する問題が重要な焦点の一つとなるが、これは宗教的倫理観が多分に反映されており、現代の日本人からすると、「前時代的」な感さえる。

教育現場でも、キリスト教の影響は大きい。まずは、男女差や性教育。米国は一部の都市部を除くと、驚くほど田舎で保守的である。日本のように国家によって義務教育の教科書が指定されているわけではないが、初等教育で使用される教科書類は、テキサスなど保守的な州で作成されたもの



が好まれる。私は、大学では人種や性差に関する問題を扱った科目を教えているが、こういった科目は、とくに宗教観が影響しやすいので、教えるのが難しいコースと認識されている。生徒や父兄からの苦情が出やすいので、わが大学では、自ら進んで教えたがる先生は減少傾向にある。

私の教えるジェンダーのコースは、「科学・医学と性差」というテーマから入り、男性学も含むので、女子学生がほとんどを占める通常の社会学部のジェンダー関連のコースとしてはかなり珍しく、受講生の数に男女差がほとんどない。また、他の急進的な教授より、かなりマイルドな内容なので、すぐに満席状態になる。にもかかわらず、受講後の生徒のコース評価はなんとも厳しいものがある。例えば、教科書に従いこんなふうに教える。「様々な性差の物差し（例えば、性染色体・外性器の形状・ホルモン量やバランスなど）を鑑みると、統計的にインターセックスと呼ばれる状態にある人間は、普通のひとが思っているよりかなり多く存在し、人間を男女にきっちり二分するのは、実は困難な作業であることがわかってきた。性染色体がXY（男性）でも、外性器を含めた外見が完璧に女性に見える人間もおり、そのことに本人さえ気づかないケースがあったり、オリンピックの性別判断の基準も一貫していない。というより、科学的に判断基準を設定するのが非常に困難であり、実際科学者も困っている」など、色々具体例も挙げていく。すると、学期末の授業評価に、生徒から次のようなコメントが提出される。曰く「教授は面白いのだが、教えられる内容がキリスト教と反し、信仰心を破壊された」とか、

「神は男と女しか造っておらず、この教授はけしからんことを教えている」とか。

一番悩ましいのは、旧約聖書の教えとは反するダーヴィンの「進化論」を、ポスト・ゲノム時代の人種研究で、どうやって教えたら苦情が少なくなるかだ。特に、コロナ禍で自宅学習が中心だったところは、生徒の親たちが横で授業を見ていることもあったので、びくびくしながら授業をしたものである。以前、米国のテレビ番組で『天才児』というのがあった。8から12歳のIQの高い子供たちが全米から集い、大学資金を競うリアリティ番組である。その中に、米国における宗教と教育の緊張関係を如実にあらわしたエピソードがある。敬虔なクリスチャンを母に持つ男の子が、ビッグ・バンとは何かという質問をされて困ってしまった。競争も激しくなり、ミスは許されない。しかし、「ほんとう」の科学的な答えを言ってしまえば母親は悲しむ。聖書の教えを守れば、奨学金はもらえず、コンペには負ける。男の子は泣きそうな顔をしながら、会場にいる母親と審査員の顔を交互に何度も見る。小さい子どもの心の葛藤に、私は見ていて涙が出てきそうになった。そして彼は意を決して言った。「これからいうことは自分の信じていることとは無関係である。科学者によればこうである」と。そして、科学者の答えを正しく述べた男の子に、審査員は「正解」の判断を下した。私は、感激に涙が止まらなくなって、我がことのように狂喜し小躍りしてしまった。